

夏の子ども

畔柳 和代

2013 年の秋に映画『私が愛した大統領』 (*Hyde Park on Hudson*, 2012) を三回観て、三度目に「ポリオ」という言葉が発せられる回数をかぞえた。台詞のほかに、フランクリン・デラノ・ローズヴェルト (以下 FDR と略す) の遠戚デイジー役の語りに耳を澄ませたつもりである。(邦題の「私」はデイジーのこと。) 94 分の作品の中でこの言葉が語られるのは一度のようだ。

このロジャー・ミッシェル監督作品 (脚本リチャード・ネルソン) は、1939 年 6 月に英国王ジョージ 6 世夫妻が訪米した際、FDR の母親がホステスとなって、ハドソン川沿いの私邸ハイドパークで国王夫妻をもてなしたときのことを脚色して描いている。晩餐会が終わり、客が帰ったあと、FDR とジョージ 6 世が書斎で互いの弱さをさらけだし、心を通わせるシーンがある。書斎にいるのは二人だけだ。近い将来始まるであろう戦争に向けて、英国王は支援を要請するために渡米している。王は用意してきた原稿を出し、自国の命運をかけて説得を試みるが、どもってしまってもうまく話せない。苛立つ王が “This goddamn stutter!” と口にする、FDR が “What stutter?” と応じてから一拍おいて “This goddamn polio!” と言う。ここで FDR 役のビル・マーレイはそれまでいた席から離れ、書斎における自分の定位置である机の前の椅子まで、テーブルなどを支えにして手の力でじりじりと進みながら、長い台詞を言う。私が足を使えないことに誰も言及しない、人は見たくないものは見ないし、国のリーダーの弱さや真の姿など知りたくもないのだ、と。

書斎シーンから一夜明けて、FDR とジョージ 6 世が水着姿となり、手だけで運転できる車を FDR が運転して、二人で泳ぎに行くシーンがある。プールの中の様子がうつり、スクリーン全体がうすい青に染まるなか、二人が楽しげに動く。水中の大統領がスクリーンをなめらかに横切ると、最後に足がすーっと細長く映る。この作品で FDR の素足が映るのはこのときだけだ。1882 年生まれ、FDR は、1921 年にカナダでポリオに罹患し、第二次世界大戦中の 1945 年 4 月 12 日に亡くなった。

2013年に刊行されたゲイル・ゴドウィン著『フローラ』(Gail Godwin, *Flora*)は、FDRが亡くなった年の夏を描いた小説だ。ノースカロライナ州を舞台とし、1945年6月第2週から8月6日に重きが置かれ、「ポリオ」という言葉がたびたび出てくる。語り手ヘレンは1934年8月7日生まれで、3歳のときに母を亡くし、父方の祖母ノニーと父と三人で暮らしていたが、1945年3月下旬に祖母ノニーが亡くなる(この祖母の享年はFDRと同じ63歳と思われる)。ヘレンの父親ハリーは公立高校の校長で、前年につづいて学校が夏休みのあいだはテネシー州オークリッジで戦争にかかわる秘密業務につくために6月1日に家を離れることになっていた。そこで、妻のいとこで、ノニーと文通をしていたフローラに娘の世話を頼む。10歳のヘレンと大学を出たばかりの22歳のフローラの二人暮らしが始まって間もなく、地元でヘレンの友人を含む二人の子どもがポリオにかかったことが判明し、これをハリーに報告したあと、フローラとヘレンの行動範囲は著しく狭められる。16歳のときにポリオにかかり、足を引きずって歩いているハリーは、娘が自分と同じ病にかかることを恐れ、娘と世話役フローラに不要の外出を禁じるのだ。二人はヘレンの友を見舞うことも、教会へ行くこともできなくなる。フローラが車を運転できないため、もともと食料は店から配達されることになっていた。

ヘレンにとって、「隔離」されて過ごす1945年の夏休みは、身近な人々がすでに遠のいたか、遠のいていく夏である。ポリオにかかった友人ブライアンは一命を取りとめて退院したのち、次の施設に運ばれる前夜にヘレンにお別れの電話をかけてくる。次の日に救急車で運ばれる先は、「よくなるようにしてくれる場所。学校もそっちで行くんだ」とブライアンは言い、ヘレンとは顔を合わせないまま去って、ブライアンとヘレンはその後30年以上連絡が途絶える。10歳のヘレンは、目の前にいるフローラと亡くなった祖母を比べて祖母を懐かしみ、フローラは大人なのに感情を吐露しすぎる、すぐ泣く、要らぬことまで人に言うなどと批判的な目で見ていく。後年、作家となり、年齢も七十をこえたヘレンは、1945年の若いフローラを懐かしさと罪悪感をもって振り返り、祖母の昔話や手紙も回想に織り込みながら、祖母の抑制された言動や思慮深さと表裏一体となっていた嘘や秘密や沈黙についても、祖母ゆずりの抑制した語り口で静かに語っている。1945年に消えた友ブライアンは1980年代にヘレンの人生に再登場して、ヘレンが小説に「書かなかったこと」を指摘する読者となる。

＊

ジョン・クロウリーの中篇「シェイクスピアのヒロインたちの少女時代」(John Crowley, "The Girlhood of Shakespeare's Heroines," 2002)は何年も前に読んで以来、不思議に思っている小説だ。地味な作品だが、読むたびに落ち着かない気持ちになる。この作品におけるポリオの描き方がようやく見えてきたのは、どんな内容の小説か知らないまま『フローラ』を衝動的に買ったり、『私の愛した大統領』の予告編を目にしたたりする偶然が重なって、この二つの作品を知ったのちにクロウリーの作品を見直したときである。

「シェイクスピアのヒロインたちの少女時代」の語り手も、自分の人生を大きく変えた夏を振り返っていて、作品には二つの時間が描出されている。ひとつは、1959年の夏で、インディアナ州主催のシェイクスピア・フェスティバルに語り手が高校生の見習いとして参加し、『ヘンリー5世』上演に向けて作業に励み、同じく高校生で見習いのハリエットと親密になり、公演終了後まもなく、二人がポリオにかかって離れ離れになるまで。二つめは、シェイクスピア・フェスティバルから長い時間を経て再会した語り手とハリエットが再びつきあっている1980年の夏である。語り手はエリザベス朝演劇の研究者となり、ハリエットは「お気に召すまま」という名の店を持っている*。

クロウリーがこの作品に描いているのは、ポリオワクチンが開発されたあとのことである。アメリカ合衆国では、FDRがポリオ患者のための財団をつくり、これがのちに患者およびポリオ研究のための基金となり、ワクチン開発に資金が投じられた。1955年4月にソークワクチンが認可され、使われるようになって、アメリカにおけるポリオの罹患率が著しく下がった。「シェイクスピアのヒロインたちの少女時代」の語り手とハリエットは、それぞれ健康上の理由や家族の意向により、学校で予防接種を受けなかったという設定で、1959年夏にポリオに罹患する。

『フローラ』をなぞって言えば、「シェイクスピアのヒロインたちの少女時代」は、ある日、友人の前から姿を消していったブライアンたちの側の物語だ。語り手とハリエットは、同じ日に同じ病院に運び込まれて入院するが、二人はそのことを知らないまま、互いの世界から消える。のちに偶然再会した二人は、ポリオにかかって回復した人たちが、ほかの人から「見えない」ことについて話している。

われわれがみな互いに避けあっていたのも、ひょっとするとそのせいだ。病院以外の場所で二人が並んでいたら、衝撃的な無作法となっただろう。考えてみてほしい。われわれは大勢いたのだ。それを覚えている年代ならば、われわれ

が二人連れ立っているのを見た記憶はあるだろうか。街角、アイスクリーム屋、映画館などで。一度もないはずだ。

あるときハリエットにそう言ったら、馬鹿らしいと言われた。人が私たちを見たことがないのは、あそこ私たちが家から出られなかったからよ。ポーチから降りられなかったり、歩道の縁や階段を上がれなかったりしたから。それだけ。

「並んでいるところを見たことがない？」そう言ってハリエットは笑った。「私たち自体、見たことがないのよ。見ようにも、いなかったんだもの」

これは作品終盤からの引用（拙訳）である。この時点で、「ポリオ」という言葉はまだ使われていない。語り手が病気になり、それが夏に特に恐れられていた病気で、湖やビーチと関わりがあるとされていたこと、ワクチンが開発されて病気がたちまち消えてなくなったように見えたことは記されているが（ただし「ソーク」という名は出てこない）、「ポリオ」という言葉は一度も使われていない。

この作品に「ポリオ」という言葉は三度しか使われていない。作品のほぼ終わり近く、1980年の夏にハリエットの家を語り手が訪ね、二人で過ごす夜にハリエットが三回言うのだ。それは、自分たちがこれからなるかもしれないポストポリオ症候群というものについて医師から聞いた、と語り手に説明するときのことだ。そこまでは、かつて夏に子どもを大勢襲い、1959年の夏にティーンエイジャーだった二人を襲った病は、文章のなかで前面に出ることではなく、言葉にされないまま、静かに存在しているのである。

*クロウリーの作品のタイトルは、1959年にハリエットが図書館で借りる、メアリ・カウデン・クラーク(Mary Cowden Clarke, 1809-98)の著書『シェイクスピアのヒロインたちの少女時代』(*The Girlhood of Shakespeare's Heroines*, 1850年から1852年にかけて3巻を刊行)からとられている。